

発表タイトル	戦没者慰霊におけるマリア観音の諸相 —グアム島・サイパン島の事例を中心に—
発表者所属名	日本歴史研究専攻
発表者氏名	君島 彩子

本発表は、グアム島、サイパン島、レイテ島、硫黄島など太平洋戦争の激戦地であった地域に「マリア観音」と呼ばれている観音像が数体あることに着目し、戦没者慰霊において、「マリア観音」という名称が使われるようになった背景を考察する。

これまで太平洋諸島における戦没者慰霊の研究は、遺族や戦友による遺骨収集や慰霊巡拝を中心に行われてきた。先行研究によって遺骨収集や慰霊巡拝を行うなかで、死者の霊を慰め、戦争の記憶を留めるため多くの慰霊碑が建立されてきたことが明らかにされている。こうした脈絡のなかで、本発表で扱うマリア観音も戦没者慰霊のため建立された仏像の形状をした慰霊碑と捉えることも可能である。そこで本発表では、潜伏キリシタンの信仰対象であったマリア観音とは全く異なる、新たなマリア観音信仰が、戦没者慰霊のなかで生じたことを報告する。

本発表ではグアム島とサイパン島の事例を紹介する。初めに紹介するグアムのジーゴ平和慰霊公苑に内に建てられた「我無山平和寺 (House of Prayer for Peace)」の本尊の慈母観音は、マリア観音とも呼ばれている。この観音像は、聖母マリアの「愛」と、慈母観音の「慈悲心」を表現し、敵味方問わず全ての戦争の犠牲者を慰霊し、世界平和を祈念するとされている。毎年、日本の仏教僧とグアムのカトリックの大司教による合同慰霊祭で行われていたが、近年この慰霊祭は「マリヤ観音 (ママ) フェスティバル (Mary Kan-non Festival)」と呼ばれるようになった。

続いて、サイパンのシュガーキングパーク内にある「南溟堂 (The Saipan International House of Prayer)」の本尊である慈母観音を取り上げる。この像もマリア観音と呼ばれている。南溟堂は、僧侶によって建てられた寺院風の建築であるが、マリアのように子供を抱く母の像が中心に置かれていることから、近隣の住民のなかには日本人が建てた日本様式のキリスト教の教会であると考えている者もいる。

グアムとサイパンのマリア観音は、相互の情報交換が行われずに、異なる人物によって祀られたものであるが、共に怨親平等に戦没者を慰霊するものであった。遺族や戦友が慰霊巡拝に訪れるようになると現地の人々との交流が生まれ、日本人だけではなくアメリカ兵や原住民の慰霊も行うことが望まれるようになったと考えられる。

怨親平等の戦没者慰霊を行うなかで、仏教とキリスト教の融合を象徴する言葉として「マリア観音」という名称が使用されるようになった。さらに、死者を慰める者の表象として子供を抱く母の姿の像は、既成の宗教には囚われない形で、地域の住民に受け入れられていた。その結果、「死者を慰める母」と「怨親平等」を合わせた象徴として、「マリア観音」は太平洋の島に祀られたと結論づけられる。